

訪問研修を振り返って ～校内で学び続ける教師を支援して～

研修部校内研修支援チーム

齋藤和秀 富澤宏二 吉川喜代江 谷口恵美 林みち子

現職教員の研修において、学校での校内研修が重要視されるようになる中、平成25年度の教育研究所機能強化検討委員会でも訪問研修の充実が提言された。これを受けて、校内研修支援チームでは訪問する地域や学校種を広げ、昨年度までの要請研修を継承しつつ、より効率的で効果のある訪問研修を実施してきた。訪問研修の効率と充実のために、嶺南教育事務所や市町教育委員会（以下、市町教委）等の他の教育機関の協力を得た訪問研修、大学の支援により専門性を高めたミドルステップアップ研修、タブレットなどを導入した自治体や研究指定校等へのICT活用教育を支援する訪問研修などを実施してきた。この1年間に実施してきた訪問研修を振り返り、学校を取り巻く環境が大きく変化してきている中、教職員の適応力・指導力を高めるためにどのような訪問研修を実施していくかを提案する。

〈キーワード〉 校内研修の活性化 ミドルリーダー ICT活用 継続的な支援

I はじめに

昨年度、県学力向上センターは、教育研究所機能強化検討委員会を立ち上げ、今後の教育研究所の在り方を検討し提言をまとめた。その中で教員研修については、研修をより受講しやすい体系に改めるため、通信型研修の導入、集合研修における実践型集合研修の充実、学校への訪問研修の充実が提言された。

また、県学力向上センターでは、学校全体の教育力向上に関する指針を示したリーフレットを学校種ごとに作成し全教職員に配布し、教員が学び合うことによる学校全体の教育力の向上を目指した。

これらを受けて、今年度より新体制になった教育研究所研修部校内研修支援チームでは、昨年度以上の訪問数と充実した内容の訪問研修を計画した。昨年度に引き続き、学校それぞれのニーズに応じた訪問研修を実施し、教科指導、学校改善、情報教育、教育相談および生徒指導等に関する支援をはじめ、さまざまな支援を実施した。さらに今年度は、嶺北地区の各市町教委の指導主事訪問にも所員が同行し、指導主事と連携して教科指導を行い、学校現場と教育研究所が連携した校内研修を呼びかけ、効率的で効果的な訪問研修を実施した。

II 訪問研修の全体像

1 研修項目

昨年度まで実施していた要請研修の項目や申込方法などの基本的なスタイルは変更せずに、市町教委指導主事との学校訪問時や集合研修等で、現場の先生方に教育研究所が実施する訪問研修の利用を呼びかけた。

研修項目と主な内容は次のような内容で行い、申込みは主に電話で受け付けた。

(1) 教科指導に関する支援

- 市町教育委員会と連携した訪問、各教科研究会での授業づくりに関する支援
- コア・ティーチャー養成事業指定校での研究支援 ○研究授業等での授業づくり等に関する支援
- 実技指導等に関する支援（国語科書写、小学校理科実験、音楽科、図画工作・美術科） など

(2) 学校改善に関する支援

- ミドルステップアップ研修受講者の研究支援 ○授業研究会の在り方に関する支援
○校内研修会の企画・運営に関する支援 ○ファシリテーションに関する校内研修の支援 など

(3) 情報教育に関する支援

- 授業におけるICT機器の活用に関する支援 ○ICTを活用した授業づくりに関する支援
○情報モラル、学校セキュリティに関する支援 ○ホームページ作成・更新に関する支援 など

(4) 教育相談および生徒指導に関する支援

- 不登校、いじめ、発達障害等の理解と対応に関する支援 ○SNS、ネットトラブルに関する支援
○Q-Uに関する研修の支援、ソーシャルスキルに関する研修の支援 など

2 学校への訪問研修の充実

今年度から新たに計画した市町教委と連携した学校訪問の他に、教育研究所機能強化検討委員会の提言に示された教員OBによる研修と研究会等への訪問については次のように計画し実施した。

5月から7月にかけて、退職校長会に学校教育支援ボランティアへの支援内容の登録を依頼した。その登録者（26名）に聞き取りし、学校を支援できる具体的な内容を検討し、継続的な内容でなく単発的な内容で実施することにした。具体的には、10経年、臨時任用者研修（県立学校）の授業研究会で、若手教員に豊富な指導経験を活かして助言をしていただいた。また、中学校では総合的な学習の時間のゲストティーチャーとして講義をしていただき、現場の先生方の教科指導または授業内容の支援を行った。また、研究会等への講師としての訪問は、昨年度までも実施しているが、小教研、中教研、高教研など各教育研究会には、外部人材活用を呼びかけ、義務教育課や高校教育課との連携を昨年度以上に強化した。

3 継続的な支援と訪問研修の広がり

市町教委と連携した学校訪問の際に、本所の事業（特に訪問研修）の案内と説明を行い、その結果、「指導主事訪問から訪問研修」として、昨年度まで訪問が少なかった小中学校への訪問、新たな学校への訪問が実施できるようになった。また、「集合研修から訪問研修」、「各研究会から訪問研修」という受講者が学校に戻ってからの校内研修を支援する継続的な形の訪問研修も実施できた。

4 学校等への訪問数

平成26年12月末までに、531件の訪問を実施しており、市町教委と連携した学校訪問や県立高校の研究授業、公開授業への教科指導に関する訪問が増え、その結果、ほとんどの県立学校と約7割の嶺北地区の小中学校に訪問することができた。また、校種別では、小学校189件、中学校93件、高校145件、特別支援学校16件、研究会など88件であった。なお、昨年度との比較、各市町小中学校や県立学校の訪問状況は以下の通りである。

内容別の訪問状況

	教科指導	学校改善	情報教育	教育相談	他	合計
平成 25 年度	59	86	75	62	15	297
平成 26 年度	339	54	65	62	11	531

平成 26 年度は、12 月末までの数値

校種別の訪問状況

	小学校			中学校		
	学校数	訪問数	割合(%)	学校数	訪問数	割合(%)
福井市	50	26	52.0	23	16	69.6
永平寺町・勝山市・大野市	26	23	88.5	11	11	100.0
あわら市・坂井市	29	17	58.6	7	6	85.7
鯖江市・越前町	20	17	85.0	7	5	71.4
越前市・南越前町・池田町	23	20	87.0	12	11	91.7
嶺北地区	148	103	69.6	60	49	81.7
嶺南地区	54	3	5.5	16	6	37.5

	学校数	訪問数	割合(%)
県立高等学校	29	28	96.6
県立特別支援学校	11	9	81.8

Ⅲ 市町教育委員会と連携した訪問研修について

1 研究のねらい

訪問研修の充実を考えた場合、その学校のニーズや現状に応じて、より積極的に教育研究所から各学校に研修の提案を行う必要がある。そのためには、市町教委との関係を密接にし、学校の授業や研修がどのように行われているか、どのような支援のニーズがあるのかを把握する必要がある。昨年度の本所紀要の中でも、今後の訪問研修の改善に関する提案があり、その中で市町教委との連携強化が挙げられていた(2013 山口)。そこで、今年度から春と秋に実施される小中学校への指導主事訪問に所員も同行し、訪問研修の可能性の広がり糸口とした。

2 今年度の目標

- ・各市町教委の指導主事との関係構築
- ・学校の授業や研修の状況の把握
- ・教育研究所の事業の広報（SASAのデータ活用、通信型研修、訪問研修について）

3 今年度の取り組み

(1) 訪問マニュアルの作成

- ① 市町ごとの担当者配置（研修部）
- ② 市町ごとの訪問担当者配置

市町ごとの担当者や訪問担当者は、教科のバランスではなく、地域の特性を考慮して、原則的に所員の居住地やこれまでの勤務校などで配置した（一部の市町は配置できなかった）。その地域の教育に携わった所員であることで、市町教委の指導主事と所員ともに話がしやすいと考え、市町によって教科に偏りはあったが、専門性より市町との関係構築を優先させた配置となった。

(2) 春季の訪問

地区担当者が市町教委の指導主事と打ち合わせを行ってから、訪問研修が始まった。初めての取組みであったため、双方手探りであった。年間を通じて嶺北の小中学校をすべて訪問する計画であったが、実際は指導主事訪問の時期が限定的であり、本所の他の業務もあり実現できなかった（平成26年度 指導主事と同行した訪問数 119件）。訪問は提案授業と研究会の参加を原則としたが、市町によっては午前の一般公開授業から参加することもあった。提案授業の教科の決定の時期も様々であったこともあり、地区担当者が校種や専門教科にこだわらず訪問担当者を決定した。校種や教科を超えた授業や研究会に実際に参加することは、所員及び訪問校にとって有意義であると考えられる。

学校訪問当日、訪問担当者は訪問校で市町指導主事と合流して授業を参観し、その後の授業研究会に参加する。研究会では授業について助言などを行うとともに、本所の訪問研修などの事業説明や訪問校の研究会のあり方や支援のニーズを把握し、訪問校のSASAのデータ分析や本所ホームページにある報告書の活用の方法を紹介した。しかし、校種や教科を超えた訪問は、所員に戸惑いを与え、所内の事後研究会では、参加のあり方など不安の声が多く聞かれた。

(3) 秋季の訪問

春季の訪問を終え、市町によっては、提案授業の専門教科の所員に対しての派遣依頼が出始め、専門教科を優先して配置して対応した市町もある。そのため、担当者が当初の地区割りを越えて訪問したケースも多くあった。しかし、このような訪問により、授業研究会において他の市町の様子を情報提供できることも多くなった。春季の訪問から少しずつ地区担当者や訪問者と市町教委の指導主事との関係が構築でき、市町ごとに指導案の送付や研究会の参加の形が出来上がってきた。所員が専門でない校種・教科を超えた訪問でも「子どもの学びの見取り」という観点で参加できるようになってきた。

4 今年度の成果

市町教委との連携のあり方について、手探りの状態から始まった訪問であったが、一年目として目標は達成できていると考える。また、各市町教委および各学校には概ね好評であり、来年度さらにこの訪問を期待する声が聞かれる。今年度、指導主事との訪問後に訪問校から校内研修への支援の申込みが2件あり、小規模の中学校からは提案授業の事前指導の依頼もあった。徐々にではあるが、一つの学校に継続した訪問も実施できるようになってきており、学校との密接な関係の構築が始まっている。

IV ミドルステップアップ研修における訪問研修について

1 研究のねらい

ミドルステップアップ研修のスタイルを大きく変更して、3年目を迎えた。本研修は、福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻（以下、福井大学教職大学院）と教育研究所が連携し、独立行政法人教員研修センターの教員研修モデルカリキュラム開発プログラムとして実施しており、内容は、リーダーとしてマネジメント力を身に付けることができるよう集合研修と訪問研修を組み合わせるプログラムとなっている。

本年度は、昨年度と同数の31人（うち女性は4人）が参加した。5回の集合研修の内容は、ほぼ昨年を踏襲し前半3回は理論と事例を学ぶとともに、異校種の参加者同士がクロスセッション方式によって所属校の現状と課題について考えた。そして、7月から12月にかけて、各受講者がそれぞれの勤務校でそれぞれの課題を解決するための具体的な実践を行なった。そして、それぞれの実践（各種研修会や授業研究会等）について所員ならびに福井大学教職大学院スタッフ等が各校を訪問し、そこで課題解決の支援としての校内研修を行い所属校における実践を深めた。

このようなプログラムの研修講座を設置してから3年目を迎え、集合研修の時期・内容、訪問研修の効果、学校長への協力体制等、ミドルステップアップ研修のより望ましいあり方を検討するため、この研究を進めている。昨年までの取組みは本紀要119号を参照されたい(2013 花川・金森・赤澤)。

2 今年度の取り組み

(1) 今年度のポイント

今年度のミドルステップアップ研修講座は昨年実施した(1)学校拠点方式の採用と1年間の継続した取組み、(2)クロスセッションの導入、(3)集合研修と要請研修の組み合わせ、(4)講座の一本化、(5)受講対象者の募集方法(以上、詳細は前掲論文)を踏まえつつ、受講者の所属校からの要請に基づく研修(今年より研究所が主体となって訪問するという観点から「訪問研修」と呼称を統一)のより一層の充実を図った。具体的には、昨年までは所員が訪問していたものを、今年度からは可能な限り福井大学教職大学院スタッフ等にも加わってもらい、支援内容の充実に努めた。

(2) 訪問研修の内容

所属校での実践にあたっては、第1回から第3回の研修を通して浮かび上がってきた自身と所属校の課題に基づき、校内での実践方法と時期を決めてもらった。それを担当が聞き取り、内容に応じて訪問する所員の人選や時期の調整を行った。人選にあたっては、なるべく研究内容とマッチする所員が対応できるように配慮したが、一般的な内容については担当2人(富澤、谷口)が対応することにした。また、あわせて福井大学教職大学院とも連絡を取り、参加できる大学院スタッフの調整も行った。こちら内容の専門性に合わせて、こちらから特定の大学院スタッフをお願いした場合もあったが、逆に日程さえ合えば手が空いている大学院スタッフが訪問する場合もあった。

訪問研修の要請は受講者に任せていたので、早い時期から打合せが始まり、すんなり日程が決まったケースもあったが、遅くまで連絡が来ず、担当者から督促しなくてはいけない場合もあった。日程の調整については、例えば、11月中には必ず電話連絡をしてもらうなどの締切りを設けておくべきだったかもしれない。具体的な訪問研修は、次ページの表の通りである。

以下、訪問研修の内容について具体的な事例を3つ記述する。

1つ目は小学校の事例であるが、全校で20クラスの大規模校で、生徒指導に関する校内研修会を開催した。受講者は集合研修で学習したSWOT分析を自校に適用し、事前に分析した資料を基に校内の先生方に協議をお願いした。研修会の進行は受講者が担当し、研究所の所員がSWOT分析の説明をして、大学院スタッフに講評・助言をお願いした。管理職の協力も得ながら、和気藹々とした雰囲気の中、自由に職員が意見を言える工夫がされていた。研修後、受講者からは「本校は大規模校で職員数も多く、職員間の意思疎通の機会も多くはとれていない。そこでみんなが言いたいことを言える雰囲気のある研修会は意義があった。また、大学院の先生からは生徒理解の方法などを教えていただき、良い研修となった。」との感想をいただいた。受講者にとっても、学校全体の協力関係を構築するミドルリーダーの立場を経験する機会となっていた。

2つ目は中学校における授業のユニバーサルデザイン化の取組である。この学校では、年間を通して授業研究に取り組んでおり、1学期にはユニバーサルデザインについての校内研修会を実施しており、受講者からは2学期の研修会での更なる深化を相談された。たまたま指定された日程では、本所の専門の職員が参加できない日で、かつ学校の日程も動かせなかったため、担当としても対応に苦慮した。大学院に相談したところ、ちょうど県特別支援教育センターから教職大学院に入学している先生をご紹介いただくことができ、研修会を持つことができた。事後、校長先生からは、「本校の本年度の研究副題は、『生徒一人ひとりの力や良さを引き出す指導の工夫』である。それに基づき、受講者は1学期の校内研究会で授業を提案している。それが全教職員にとって、生徒一人ひとりに目を向けたユニバーサルデザイン研修の出発点であった。そして、その延長線上に今回の研修会があった。

すなわち、受講者を核にして、全教職員の研修が連続し深化してきた。受講者の研修が、まさに学校力の向上を促進していた。今回、学校で全教職員が受講できたことが、最も効果的だった。個人が研修に出かけたり、研究発表会に参加したりしても、なかなか全教職員へのフィードバックはむずかしい。今回の研修は、我々全員が一年を通して授業のユニバーサルデザイン化を意識して来た中で行われたものであり、その意味で、全員の意識が揃い共有財産となった。今後とも、この訪問研修を最大限活用させていただきたい。」との感想をいただいた。

3つ目は担当者の発案で、受講者に定時制・通信制高等学校からの受講者3名による合同研修会を実施することとした例である。それぞれの学校で同僚を巻き込んでいただき受講者を含め3名、研究所からも3名、さらに教職大学院からも3名の方に参加していただき、全部で15人の参加者で研修会を開催した。当日は異なる学校どうしのグループと同じ学校どうしのグループの協議をそれぞれ行ったことで、内容として学校を越えた共通理解が生まれ、他校の事例に学んだり、自校だけではわからなかったことへの気づきが生まれたりという成果が見られた。受講者の一人は「研究会を校内で立ち上げ、中心となって進めることの難しさを体験することができた。思うように研修が進まず苦勞することもあったが、貴重な体験をすることができた。大学院の先生のアドバイスは校内では出ないような意見や考えで、大変参考になった。」と言っている。

以上のように、受講者はそれぞれの立場で校内の先生方を巻き込みながら、訪問研修をうまく利用して、さまざまな実践の成果を上げている。そして、本研修のねらいである「ミドルリーダーとして、学校運営や授業改善に必要な資質、能力や実践力を高めること」ができていると考える。

平成 26 年度 E131ミドルステップアップ研修 訪問研修一覧

番号	学校名	実施日	参加者	所員	福井大	合計	内容	
1	A小学校	1月20日 (火)	8人	1人	1人	10人	食育の授業と研究会	1
2	B小学校	9月19日 (金)	1人	2人	—人	3人	ICT活用のための打合せ	2
2	B小学校	11月10日 (月)	9人	2人	—人	11人	ICT活用のための校内研修会	3
3	C小学校	8月25日 (月)	7人	2人	1人	10人	SWOT分析・ロジックツリーを利用した事業検討会 (縦割りウォークラリー)	4
4	D小学校	11月17日 (月)	27人	2人	1人	30人	いじめを生まない学校作りのための研修会	5
5	A中学校	9月30日 (火)	8人	3人	—人	11人	思いやりのある心豊かな集団作り。前期生徒会の成果 と課題を踏まえた後期生徒会活動の検討。	6
5	A中学校	10月7日 (火)	1人	2人	—人	3人	前回の振り返り	7
6	B中学校	1月6日 (火)	7人	2人	—人	9人	1年学年会での「総合的な学習の時間」の検討	8
7	C中学校	11月18日 (火)	2人	2人	—人	4人	ICT機器の活用を通じた授業の実践	9
8	D中学校	8月18日 (月)	5人	2人	—人	7人	学校祭準備の現状分析と今後の運営企画	10
9	E中学校	12月15日 (木)	30人	2人	1人	33人	授業のユニバーサルデザインについての校内研修会	11
10	F中学校	9月30日 (火)	4人	1人	—人	5人	体育科としての生徒指導について	12
11	G中学校	9月25日 (木)	10人	3人	—人	13人	公開授業(道徳)と授業研究会(事前検討会)	13
12	A高校	11月12日 (水)	15人	2人	—人	17人	公開授業(国語)と授業研究会	14
13	B高校	9月30日 (火)	2人	1人	—人	3人	部活動指導の顧問間の連携について	15
14	C高校	9月19日 (金)	6人	2人	1人	9人	数学科の反転学習についての研修会	16
15	D高校	9月11日 (木)	5人	2人	1人	8人	国際化英語コースの特色作りについての研修会	17
16	E高校	8月29日 (金)	15人	2人	1人	18人	ルーブリック評価表(課題研究発表)研修会	18
17	F高校	11月6日 (木)	3人	4人	3人	10人	通信制高校における学習評価(合同カンファレンス)	19
18	G高校	12月1日 (月)	6人	1人	—人	7人	商業の知識や技術を地域社会にどのように活用する か、課題研究等実践的活動の方策を検討	20

番号	学校名	実施日	参加者	所員	福井大	合計	内容	
19	H高校	7月24日（木）	10人	2人	－人	12人	工業学科学力向上の取組について。7月15日（火）に事前打合せ。第1回7月24日（木）。	21
20	I高校	10月9日（木）	5人	2人	－人	7人	学校設定科目「観光」に関して授業研究	22
21	J高校	11月12日（水）	6人	1人	－人	7人	2年学年会として、3年生に備えて何をするか	23
22	K高校	8月21日（木）	1人	2人	－人	3人	I C T（ムードル）を利用した授業の工夫	24
22	K高校	11月12日（水）	1人	1人	－人	2人	I C T（ムードル）を利用した授業の工夫	25
22	K高校	12月12日（金）	13人	2人	－人	15人	I C T校内学習会（クラウド利用）の実施	26
23	L高校	11月11日（火）	10人	2人	1人	13人	公開授業（国語）と授業研究会の実施	27
23	L高校	11月19日（木）	18人	1人	－人	19人	公開授業（国語）と授業研究会（アクティブラーニング）の実施	28
24	M高校	11月6日（木）	3人	4人	3人	10人	一人ひとりの生徒理解を深めるための取組（合同カンファレンス）	29
25	N高校	9月10日（水）	6人	3人	－人	9人	1年生担任および学年主任に対して、キャリア教育に関するガイダンスを実施	30
26	O高校	11月6日（木）	3人	4人	3人	10人	組織として生徒指導に取り組むための土台作り（合同カンファレンス）	31
27	P高校	11月18日（火）	1人	2人	－人	3人	11月中旬に発表するICT（タブレット）利用法について、研究協議。	32
28	Q高校	9月5日（金）	5人	2人	－人	7人	地域に根ざし、支えられる学校として、今後どのような事を考え、実践していくか。学校開放の持ち方について。	33
29	R高校	10月29日（水）	13人	2人	1人	16人	公開授業（国語）と授業研究会の実施。	34
30	S高校	11月18日（火）	12人	2人	1人	15人	公開授業（国語）と授業研究会の実施。	35
31	A特支学校	8月29日（金）	1人	1人	－人	2人	I C Tに関する打合せ	36
31	A特支学校	9月26日（金）	1人	1人	－人	2人	I C Tに関する打合せ	37
31	A特支学校	11月19日（水）	16人	2人	－人	18人	公開授業と授業研究会（I C T利用）	38

296人 38件76人11件13名

(3) アンケート結果

① 受講者へのアンケート

（本年度4回目の集合研修の時に研修全体の評価を尋ねた時の結果。（ ）内は昨年度のデータである。

意見については、内容の似通ったものはまとめ抜粋した。）

質問1 御校において研修テーマの取組みを推進することができましたか。

①できた	22.6% (25.0)	・組織として取り組むことができるようになった。
②ある程度できた	64.5% (60.7)	・テーマが学校が抱えていた問題に関するものであったため、学校においても役立つものとなった。学校長の協力が大きかった（校外活動）
③あまりできなかった	12.9% (14.3)	・自分の働きかけが連関して、小集団ではあるが動き始めた感がある。
④できなかった	0.0% (00.0)	

質問2 集合研修は取組みに役立ちましたか。

①できた	41.9% (42.9)	・授業の見方の講義が特に良かったです。
②ある程度役立った	58.1% (53.6)	・今までの考えや取組を振り返り、自分の立ち位置を確認できた。
③あまり役立たなかった	0.0% (03.4)	・他校の先生方や校種の違う先生の意見や取組を知ることができた。
④役立たなかった	0.0% (00.0)	・考えるきっかけ、切り口になることがたびたびあった。

質問3 訪問研修は取組みに役立ちましたか。

①できた	71.0% (62.9)	・教職大学院や特支センターの先生に来ていただき、いろいろなことを学び、それを全教職員で共有することができました。
②ある程度役立った	41.9% (33.3)	・学校内の教員からは出ないような意見や考えを聞くことができて大変参考になった。また、自分の取組を理解してもらえた。
③あまり役立たなかった	0.0% (03.8)	
④役立たなかった	0.0% (0.0)	

質問4 研修を通しての御自身のミドルリーダーとしての資質能力の向上についてご自由にお書きください。

- ・誰か任せにしていたことを、自分でやるように、自分が進んで引き受けることがいくつも出てきました。
- ・学校内での自分の役割が明確になった。曖昧だったものがはっきりとして仕事の見通しが立つようになった。
- ・この研修を通して、ICTの活用など新しい試みをする事ができ、良い機会が得られたと思っている。
- ・研究会を校内で立ち上げ、中心となって進めることの難しさを体験した。貴重な体験をすることができた。

② 学校長へのアンケート結果（多くの御意見が寄せられたが、紙面の都合上、一部のみ掲載）

質問1 受講者の取組みは、御校の学校力向上に結びついていますか。

- | | | |
|------------|--------------|---|
| ①できた | 41.4% (40.0) | ・本校における書画カメラの研修会は本当に良かった。研究所の講師の支援を受けた、このような研修会は大変有効に感じた。
・受講者を核にして、全職員のユニバーサルデザイン研修が連続し深化してきた。受講者の研修が、まさに学校力の向上を促進していると言える。 |
| ②ある程度できた | 55.2% (56.0) | |
| ③あまりできなかった | 3.4% (04.0) | |
| ④できなかった | 0.0% (0.0) | |

質問2 受講者は、研修を生かして学校全体の授業力向上や教員の資質向上を推進できたでしょうか。

- | | | |
|------------|--------------|--|
| ①できた | 38.0% (40.0) | ・ミドルリーダーには、学校運営への参画意識を高めるため、職務遂行上、適切な役割と責任を担わせることが必要であると考えている。研修をとおしてファシリテーターの経験を積み上げ、授業力向上のみならず、他の教職員の資質向上にも貢献した。 |
| ②ある程度できた | 58.6% (44.0) | |
| ③あまりできなかった | 3.4% (16.0) | |
| ④できなかった | 0.0% (0.0) | |

質問3 御校の要請に応じて本所が実施した訪問研修は効果的だったでしょうか。

- | | | |
|--------------|--------------|---|
| ①効果的だった | 71.4% (54.2) | ・今までの研修では、ほとんどが受身の姿勢であったが、訪問研修ということで、主体的に取り組むことができ、身につくことも多かった。
・学校で全職員が受講できたことが、最も効果的だった。個人が研修に出かけたり、研究発表会に参加したりしても、なかなか全職員へのフィードバックはむずかしい。今回の研修は、その意味で、全員の意識が揃い共有できた。今後もこの「訪問研修」を最大限活用させていただきたい。 |
| ②ある程度効果的だった | 28.6% (41.7) | |
| ③あまり効果的でなかった | 0.0% (4.2) | |
| ④全く効果的でなかった | 0.0% (0.0) | |

質問4 この研修は、貴職による授業改善指導の強化等、学校経営に協力することができたでしょうか。

- | | | |
|------------|--------------|--|
| ①できた | 48.3% (36.0) | ・ミドルリーダーの育成は、学校における OJT だけでは不十分なところがあり、研究所において計画的に実践を通して力をつけていただくことは、学校力の向上に欠かせない。今後ともよろしくお願ひします。
・この講座に参加することで、受講者はミドルリーダーとしての意識が高揚し、学校を運営する上での大きな力となっている。 |
| ②ある程度できた | 41.4% (56.0) | |
| ③あまりできなかった | 10.3% (08.0) | |
| ④できなかった | 0.0% (0.0) | |

③ 考察

受講者アンケート、校長アンケートともに、その結果は昨年と余り変化はないが、訪問研修に関する評価は、昨年を上まわっている（受講者で「できた」という回答が8ポイント、校長で「効果的だった」という回答が17ポイント）。この結果は今年度、訪問研修に福井大学教職大学院スタッフ等が関わったことが、内容の充実につながり、評価も高まったと考えている。

3 今年度の成果

昨年までの取組の成果（前掲論文参照）に加えて、今年度は教職大学院の先生方などによる訪問研修を強化したことで、内容の充実に必要な成果が見られた。

(1) 受講者の教師力の向上について

- ① 1年間の継続した実践を通して、研修テーマの取組を推進すること
アンケートでは「できた」「ある程度できた」の合計で87.1%の受講生が成果を認めている。
- ② ミドルリーダーの役割について、よく理論と事例を学ぶこと
集合研修が「役に立った」「ある程度役に立った」の合計が100%であった。講義・演習は受講者に適切な学びを提供できたと考える。
- ③ 受講者や教職大学院スタッフ・院生と協議することでファシリテーション力や傾聴力を高めること

毎回、グループ協議やクロスセッションを実施したことで、そこから刺激を受け、話し合いを通じた気づきが得られたことは、事後の感想に多く見られた。

(2) 学校力の向上について

① 参加者のテーマが学校力の向上に直結していること

学校長へのアンケートでは、特別な事情によるものを除く全てが「結びついている」あるいは「ある程度結びついている」と回答している。具体的には、授業改善や校内研究体制の充実、進路指導体制の充実、学校運営全体に関わるものがあげられ、受講者が勤務校で中核的な役割を担っていることがわかる。

② 学校全体の授業力向上や教員の資質向上を推進すること

アンケートでは、96.5%の学校長が「できている」あるいは「ある程度できている」と回答している。研修テーマの推進について受講者が22.6%が「できた」と回答したのに対して、所属長の「できている」は37.9%と高い評価である。

③ 管理職による授業改善指導の強化に協力すること

89.7%の学校長が、「できた」「ある程度できた」と回答している。今年度は校長から直接意見を聞き取る機会とはなかったが、管理職の学校経営に協力する体制はできていると考える。

(3) 運営全般について

① 要請に応じて、効果的な訪問研修を実施すること

学校長へのアンケートでは、71.4%が「要請研修は効果的だった」、28.6%が「ある程度効果的だった」と回答している。具体的には、受講者への支援が効果的だったとの回答の他に、校内研究会、学年会や部会、あるいは若手教員への指導・助言など周りの教員集団への効果に対する評価の声が寄せられた。

② 年間を通して継続的な支援を行うこと

全ての学校に対して、延べ数で38回の訪問研修を実施した。事前打ち合わせと授業研究会時の2～3回実施した事例が6校であった。昨年度が43例であったことを考えると、今年度はやや継続的な支援が手薄になった。次年度以降の課題である。

③ 所員全体が、教員を指導する能力を高めること

教育研究所では月1回のペースで、指導者として福井大学教職大学院から柳澤昌一教授はじめ複数の教官をお招きして、所員同士が互いにファシリテーターを務め、様々なテーマについてグループ協議を行い、力量を高める協働研究会を行っている。また、ICT活用やユニバーサルデザインに関する独自の所内研修会を開催して、通信研修や訪問研修に生かせる事項やスキルを学んだり、それらに関する情報交換を行ったりした。それぞれの受講者や学校のニーズに対応できる人材の養成を常に意識して、所内全体として人材の育成を進める必要を感じている。

V 情報教育の訪問研修について

1 研究のねらい

我が国は、情報化・グローバル化・少子化の急速な進展への対応が課題となっており、グローバル人材育成などの取組が急務となっている。その中で、ICTを活用した学びの姿が変化しており、多様化が進みつつある。しかし、経済協力開発機構(OECD)の国際教員指導環境調査(TALIS)2013では、「生徒が課題や学級の活動にICTを用いる」指導実践を頻繁に行う教員の割合が、参加34ヶ国・地域の中で最下位であった

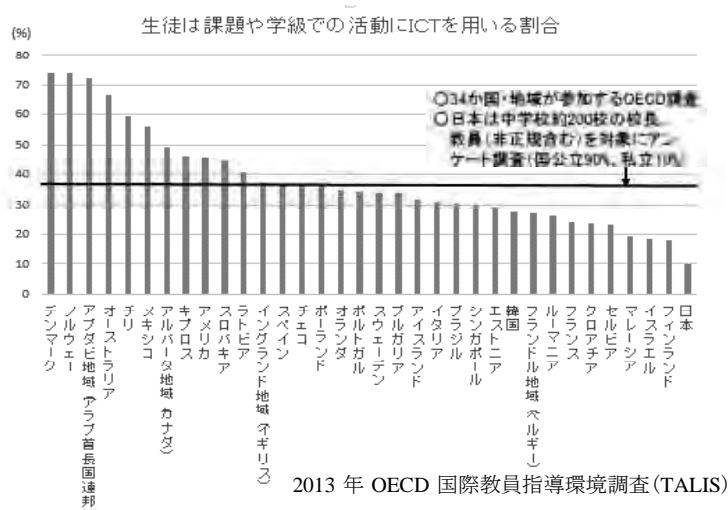


図1

(図1)。ICTを活用した教育に取り組む動きは全国に広がり始めているが、各国と比べると遅れている現状が見受けられる。

ICTを活用した授業を効果的に行っていくことによって、子どもたち同士の学び合いを取り入れた協働学習の機会を多く取り入れることが可能になる。教育研究所では、ICTを活用したわかりやすい授業を行うため、教員のICT活用指導力の向上やICTを活用した授業づくりの支援を行っている。

2 今年度の取り組み

(1) 実施校と実施内容

教育研究所では、ICT(タブレットPC等)活用支援、情報モラル・セキュリティ、ホームページ作成・更新などの訪問研修を行っている。

ICTの活用支援は、昨年度は実物投影機とタブレットPCが半々であったが、今年度は1件だけが実物投影機の実施で、残りの51件がタブレットPCを含む訪問研修であった(図2)。研修後のアンケートでは、「情報教育研修の内容は授業に役立つと思うか」について、役立つ、概ね役立つと回答した割合は95%と高く、ICTを活用した教育の意義について認知されてきている。

文部科学省は、平成23年に定めた、「教育の情報化ビジョン」を基に『学びのイノベーション事業(H23~25年)』を実施し、平成26年に「日本最強戦略」、「世界最先端IT国家創造宣言」、「第2期教育振興基本計画」において教育におけるICTの推進を位置づけた。そうした国の動向が福井県の教育の中にも広まりつつある。

校種	件数	実施内容	件数
小学校	34	実物投影機	1
中学校	4	iPad	51
県立学校	10	ICT活用	6
その他(研究会など)	17	HP支援	7

図2 情報教育の訪問研修の校種別件数と実施内容(12月まで)

情報教育訪問研修の内容は授業で役立つと思いますか

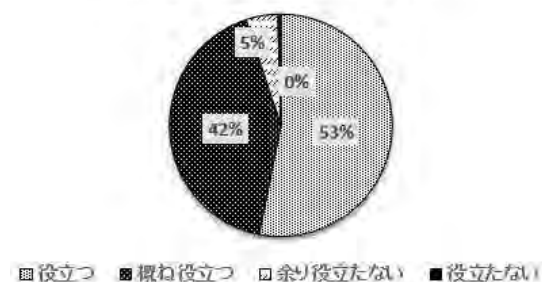


図3

また、昨年度すべての県立学校でICTの訪問研修を行ったこともあり、「ICT活用指導力に関する研修の受講状況（全校種）」（平成25年度学校における教育の情報化の実施などに関する調査）では、福井県の教員の割合が前年度より20%近く伸び、伸び率が全国1位となり全国第4位の高い割合で研修を受講している。しかし、全国1位の佐賀県との差は、50%以上あり、今後更に広げていく展開が必要である。

APP、研修の種類	主な内容や活動
①カメラ	・教材をカメラで撮影し、トリミングして拡大
② eDocReader	・カメラで撮影した教材に下線を引いたり、文字を記入したりして提示 ・前時の復習で穴埋め問題の作成 ・資料などをPDFしたものを拡大表示、文字書き込み指導
③ TwinViewer	・2画面で比較・考察の教材作成
④超速300連写	・理科の実験などにより、ミルククラウン、等速直線運動、振り子実験を撮影
⑤ Star Walkや天体観測（GPS機能）	・タブレットPCならではの機能（PCに無い機能）の紹介として、GPS機能を利用したアプリの紹介と演習
⑥スマホにひそむ危険	・情報モラルの指導、疑似体験
⑦ロイロノート	・静止画・動画対応のプレゼンビデオ作成編集
⑧ Keynote	・プレゼンシートを作成し、編集。
⑨ Coach's Eye	・体育実技（走り高飛び・器械運動）などや部活動指導での実技指導でビデオ編集と書き込み指導可能として紹介
⑩各タブレットの特徴	・iPad、アンドロイド系、Windows系のタブレットPCの違いを紹介
⑪ iTunes 経由のデータ取り込み方法（PDF化したファイルの取り込み）	・PCで作成した教材をPDF化してiTunesを経由してタブレットPCに取り込む方法の紹介（一太郎・ワード・パワーポイント作成の文書の提示方法と活用）
⑫実物投影機との融合・演習	・書道などの実習で筆の加圧などの指導に活用

(2) タブレットPC (iPad) の研修

今年度は研修内容をユニット化

図4

し依頼があった内容を組み合わせ訪問研修を行ってきた（図4）。

昨年度は、iPadの電源の入れ方などの基礎基本の初心者向けの研修が多かったが、今年度は、タブレットPCをどのように授業で活用していくかについての研修の依頼が多くなってきている。その依頼内容に合った研修を行うために、操作方法だけでなく授業を想定して教材作りを行い、作った教材を使って簡単な模擬授業を行うなど研修内容について事前に学校担当者と打ち合わせを行った。

(3) 継続支援の訪問研修

① 概要

ICT活用指導力は年々向上しているが、文部科学省から出された「平成25年度学校における教育の情報化の実態などに関する調査【速報値】」（平成24年→平成25年）のデータをみると、

- A 教材研究・指導の準備・評価などにICTを活用する能力（79.9%→80.9%）
- B 授業中にICTを活用して指導する能力（67.5%→69.4%）
- C 児童生徒のICT活用を指導する能力（63.5%→64.5%）
- D 情報モラルなどを指導する能力（74.8%→76.1%）
- E 公務にICTを活用する能力（75.5%→77.0%）

となっており、「C 児童生徒のICTにおける活用を指導する能力」が一番低くなっている。別の都道府県別データを見ると福井県は、61.9%（全国第33位）であり、ICTの活用にまだ不安を感じている教員が多いことが分かる。

今年度は、新たな取組として、タブレットPCを授業に活用してみたいと要望のあった学校に3、4回継続してタブレットPCの訪問研修を行った。

訪問研修を依頼された内容は、

- ア タブレットPCの貸し出し（個人に1台として40台、1グループに1台として8台）
- イ 授業の中でタブレットPCの活用の仕方についての支援
- ウ 児童生徒にタブレットPCを指導する手順・方法についての支援

などであった。

② 実践：A小学校

○希望する支援内容

3年生の算数「三角形」の第1時で、児童が自ら作った三角形を仲間分けをし、その結果をiPadで撮影し、撮影結果をプロジェクタで大きく映しその理由を発表する授業が行われた。この授業を行うためのiPadの貸し出しとiPadの使い方についての説明を行った。

○実践内容

1、2回目は所員が講師となって、児童全員にiPadを使用させて基本操作の授業を行った。3、4回目は、担任の先生が授業を行った。児童は、公開授業では15分



図5 公開授業の様子

と短い時間の使用だったが、どの児童も戸惑うことなくiPadを使って発表を行うことができた。実際に授業を行った後に、児童の様子や担任の先生の要望を聞き次の授業をどのように行うとよいかについて話し合いを行った。授業後の研究会では、iPadを使ったことは授業のねらいを達成するために効果的であったかについて話し合われた。その話し合いの中で「いつも授業に積極的に参加しない児童が、ペア学習で話し合い、協力して発表資料を作り意欲的に活動している姿が見られたのは、iPadの効果だと思う。」「15分と短い時間で、写真の撮影・加工・編集をし資料の作成をどの子もスムーズに行っていたのでびっくりした。」などの意見や感想が述べられた。

(4) 訪問研修の受け入れ

ICTに関する研修講座やICTを活用した授業を参観した先生が自分の学校の校内研修のために訪問研修を申し込んだり、学校の全職員で研修を受けた先生が教科や学年、個人で訪問研修を依頼したりすることもあった。また、研究指定校への長期の支援も行っている(図6)。訪問研修の受け入れが多様多様になってきている。



図6

3 今年度の成果

訪問研修後のアンケートに「学校に出向いてもらえる研修はとて有り難い」「定期的に研修を行っていただきたい」という意見があった。ICTに対して不安を抱いている教員もまだ多いため、自分から研修を受けることには抵抗を感じているが、学校で気の合った仲間と受ける研修は受けやすいと感じている方も多。研修を受けられた先生の中にも自分のタブレットPCを持っているが授業での活用は行っていない方も多く、研修を受けたことがきっかけとなり、まず研修でしたことを授業で実証し、少しずつ改良を加えて次の授業に取り組んでいるとの報告も受けている。

情報教育訪問研修受講前の期待度

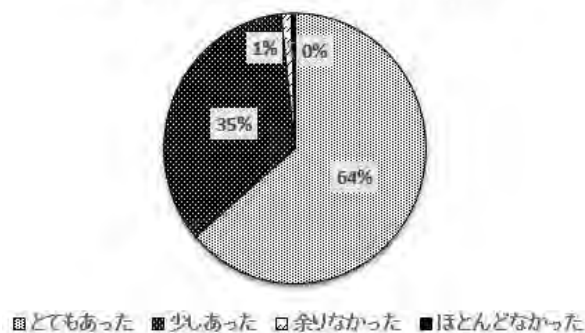


図7

訪問依頼については、初心者向けの内容から応用まで多種多様になってきているが、アンケート結果(図7・8)を見ると研修前の期待度も研修のニーズも高かった。今後は、学校で全教職員参加の研修会を行うときは、ICTを活用した教育への関心や技能に差が生まれることが予想される。そのようなときにも学校の状況を的確に把握し、効果的な学校支援の提案ができるようにしていくことが必要になると思われる。

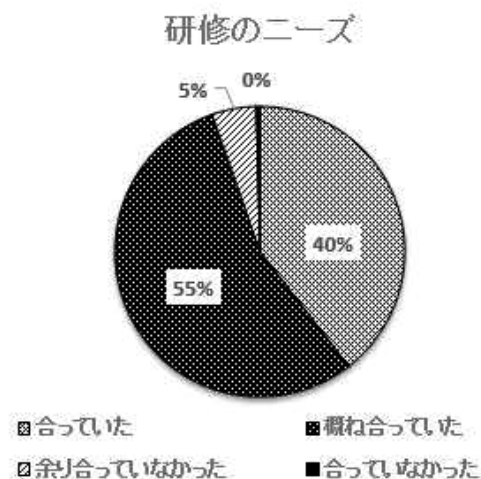


図8

VI 今後の展望

1 市町教育委員会と連携した訪問研修について

市町教委と連携した学校訪問を継続していく中で、教育研究所、市町教委、学校のそれぞれの間の垣根を低くし、お互いが気軽に子どもたちの教育に関する相談ができる関係を構築していきたいと考えている。そのことにより、訪問が単発に終わらずに、次の訪問に繋がる継続した研修にしたいと考える。そして、ある市町教委での事後聞き取りで頂いた言葉「どのような立場の方であれ、子どもたちのためのよりよい教育を求める方であれば、どなたでも授業を参観し、ご意見をいただきたい。」は印象的であった。

そのために、教育研究所として、市町教委や学校の要望に応えるための体制を構築していかなければならない。具体的には、市町教委や学校の要望に応じた多様なニーズへの対応、継続的な支援体制の構築が挙げられる。

2 ミドルステップアップ研修における訪問研修について

今年度のミドルステップアップ研修講座では、昨年までの事業に加えて、訪問研修を教職大学院スタッフが協力することで強化した。昨年までこの訪問研修は、所員だけで実施していたが、今年度からは教職大学院の先生方も加わる形で実施した。日程や内容の都合がつかないといけない話ではあったが、担当が教職大学院と緊密な連絡を取り合い、なるべく参加していただけるように心がけた。その結果、のべ11回の訪問研修で教職大学院の先生方に参加していただくことができた。やはり、大学の先生に訪問研修に加わっていただくことにより、研修会の中でも指摘していただける内容が充実深化し、受講者をはじめ研修に参加した先生方からは満足の言葉を多くいただいた。来年度は、さらにこれを進展させてより充実した訪問研修を実施できるようにしたい。

一方、課題として受講者の募集の問題があげられる。4月から5月にかけて、他の研修講座同様、受講者の募集をかけているが、なかなか自ら進んで応募してくる状況にない。昨年来、担当が各学校を訪問して趣旨を説明し、適当な方を推薦していただいたり、他の所員の協力を得ながら受講者の発掘をはかっていたりしている。この研修の効果が、今まで以上に各学校に知られ、学校力を向上したり、授業力を高めたりするために、率先して受講希望者が現れるようにしたいところである。また、それぞれの学校にどのようなニーズ、研究テーマがあるのかをよく調査して、支援が必要な学校がどこにあるのかを知った上で受講者を掘り起こしていく必要を感じている。

福井大学教職大学院の先生方には、講座設計、講義や演習、グループ協議のファシリテーター、協働研究会における所員への指導等、講座全体に関して大変にお世話になり、改めて感謝申し上げます。

3 情報教育の訪問研修について

I C Tを活用していくためには、継続的に段階を踏まえて取り組むことが必要になる。例えば、

- 1 教員が電子黒板・プロジェクタや実物投影機を使って教科書や資料、子どものノートなどを映して、経験を積み学び合う環境を整え、I C Tのよさを実感する
- 2 すべての教科でなく必要な教科で、タブレットP Cで学んだり学び合う授業を実施する

(参考：「I C Tにおけるコアティチャーを活用した教育の推進に関する懇談会」報告書(中間まとめ))
 など、授業における段階的な活用が考えられる。学校にI C Tを活用した授業を浸透していくためには研究所が果たす役割は大きく、気軽に相談に乗れる環境づくりや機会を捉えて学校へ情報教育の訪問研修を行っていくことが必要になる。今後も機器操作、授業での活用や方法についてサポートしていくために、I C T活用の事例や方法を研究していくことが必要である。また、I C Tの活用が堪能な先生を学校のコアティチャーとして育成するために、通信型研修や集合研修との連携を学校側にコーディネートとすることが重要になってくる。

Ⅶ おわりに

集合研修から訪問研修に転換を図ろうとする教育センターが増加している。その背景には、教師の力量を高めるフィールドは、子どもに向き合っている学校現場に求めるべきであるという考えから、現場をできるだけ離れない校内での研修の必要性和、教師自らの「振り返りと気づき」の重要性が意識されたことがあげられる。学校の中で教職員が集まり、外部の講師を招いて講義や演習を行う校内研修は、研修を行う場が学校であるため、学校の状況等に応じて課題設定ができ、解決を図るために有効である。

今年度の訪問研修の中から有効な成果があった事例を紹介する。A高校では、2回の校内研修（①ネットトラブルの実態と対応／②「自分も相手も大事にする態度と関わり方」としてのアサーション）とその校内研修の間に担任の指導を挟む、教育相談および生徒指導に関する継続的な支援を行った。教員の生徒指導に対する意識も変わり、相談室に来る生徒が減少する効果があった。また、B中学校では、1学期に行った校内研修（授業研究会の進め方）をうけて全員が学期に1度公開授業を行った。授業での視点を子どもの学びに当てたので意見が出しやすくなり、教科の壁を越えた研究協議を実施するようになった。これらの学校では、訪問研修を機に、取り組みの方向性を再確認し、形式化していた校内研修や授業研究を全教職員で協働して実践するようになった。

近年は、新規採用者の増加とともにベテラン教員の大量退職の時期を迎えており、これまで培ってきた高い指導力の伝授が課題になっている。同時に新学習指導要領の実施に伴う指導方法のさらなる改善や、I C T関連機器の充実に伴う教職員の指導力の向上、携帯電話・スマートフォンの普及に伴う児童生徒間の人間関係づくりの課題、特別支援教育のさらなる指導・支援の充実など、学校を取り巻く環境が大きく変わってきており、教職員の適応力・指導力も大きな課題となっている。

教育研究所として、学校からの多様なニーズに対応するために、所員のスキルの向上の仕組みが必要であり、所内の研修に新たな指導方法や時代に即した研修内容を取り入れ、学校への積極的な支援に努めていく必要がある。

《引用文献》

- 花川洋介 金森誠 赤澤達郎 (2013)「ミドルステップアップ研修の効果的な実施」『研究紀要』第119号、福井教育研究所、pp. 11-17
- 文部科学省(2014)『平成25年度学校における情報化の実態等に関する調査結果(概要)』p. 17、p. 22

○国立教育政策研究所『OECD 国際教員指導環境調査(TALIS)2013年調査結果の要約』p. 21

《参考文献》

○文部科学省(2014)『「ICTを活用した教育の推進に関する懇談会」報告書(中間まとめ)』

○山口明彦(2013)「福井県教育研究所の訪問型研修の改善と課題」『研究紀要』第119号、福井県教育研究所、
p. 23－ p26

○波多野恒 野村俊夫(2013)「ICT活用による授業改善に向けての取組み」『研究紀要』第119号、福井県教育研
究所、p. 39－ p. 44